

卒業論文

「定型」社会に抗う障害者たち
——大人の発達障害者たちの語りから——

2017年度入学
九州大学 文学部 人文学科 人間科学コース
社会学・地域福祉社会学専門分野

2021年1月 提出

要約

本研究では「大人の発達障害者」を対象とし、語りから障害当事者の生きづらさや内面的世界を探っていく。

第1章では筆者が発達障害をテーマに設定した背景や本研究の目的を述べている。近年注目度の増している発達障害は医学的診断基準や訓練など外からの判断による対処法は強調されているが、発達障害当事者の内面的世界については十分に明らかになっていない。発達障害当事者が語るライフストーリーからその内面に近づき、彼らが内から外（社会）をどう見ているのかを探っていく。

つづいて第2章では先行研究をもとに障害研究の概要をまとめ、発達障害がどのようなものか医学的な説明をしている。発達障害の様相は多様であり、特性の凹凸の現れ方も個人で異なる。また異なる領域の障害が複合している場合もあるため一貫した診断基準の確率は難しい。ここでは議論を進めていくために、調査対象者が診断されていたASDとADHD、そして発達障害者の代表的なイメージとして語られていた知的能力障害について、その特徴と現在の医学的対処法を示している。

第3章では今回の調査法や調査対象者4名の情報を記載している。本研究のテーマである「大人の発達障害者」とは、大人になった発達障害者との意味もあるが、ある程度成長してから自身を発達障害者ではないかと疑い、健常者から障害者への転身を経験した者たちを指している。半構造化インタビューの形式をとり、障害者との診断を受けた経緯や心境の変化、これまで感じてきた生きづらさについて重点的に質問していく。

第4章では聞き取り調査から得たライフストーリーをまとめている。これまで感じてきた生きづらさや挫折経験、障害のとらえ方など、当事者の様々な思いが吐露されている。障害への気づき、葛藤、受容の仕方など調査した4名の中でも違いがあり興味深かった。それぞれ本文中に引用している語りから、発達障害特性がある者の生きづらさや内面でうまく葛藤を感じてほしい。

第5章では第4章の発達障害当事者のライフストーリーをもとに考察を行う。当事者の心境は、時間の経過や障害の関する知識量によって変化していた。また発達障害者としてのステイグマは、挫折や差別など社会とのかかわりの中で強化されていた。そのほか、障害者として医学モデルに組み込まれる選択をした背景や、発達障害者と診断されることによるラベリングの弊害について検討している。

第6章ではこれまでの議論を踏まえて、発達障害者が必要としている支援がどのようなものか検討している。障害の社会モデル化を目指しているものの、合理的配慮の精神は社会に十分に浸透しておらず、発達障害者たちは成功体験を得づらい状況である。また挫折経験や社会からの排除によって自己肯定感を失い、「生きていい理由」を求めていたりする発達障害者の姿が語りから明らかになった。障害特性の治療や経済的支援だけでなく、障害者を排除するような規範の見直し、障害と共に活躍できる環境の整備が求められていた。発達障害者の生きづらさが定型発達（健常者）の特性に合わせた「定型」社会との関係の中で生じており、彼らが生きづらさにもがきながらも自分の人生を豊かにするため行動していることを指摘しつつ全体をまとめた。

目次

1 研究目的.....	1
1.1 動機づけ.....	1
1.2 本研究の目的.....	2
2 発達障害へのまなざし.....	3
2.1 先行研究.....	3
2.1.1 障害者研究概要.....	3
2.1.2 障害者への社会排除.....	4
2.1.3 障害者とステイグマ.....	4
2.2 発達障害の医学的とらえ方.....	5
2.2.1 ASD——自閉症スペクトラム症.....	6
2.2.2 ADHD——注意欠如・多動症.....	6
2.2.3 知的能力障害	6
3 調査概要.....	9
3.1 調査対象者について.....	9
4 発達障害者のライフストーリー.....	11
4.1 Aさんの語り	11
4.2 Bさんの語り	18
4.3 Cさんの語り	21
4.4 Dさんの語り	24
5 発達障害と共に生きる.....	27
5.1 医学モデルに組み込まれる発達障害者たち	27
5.2 「発達障害者」として生きる	28
5.3 見えない障害・隠されたステイグマ	30
5.4 柔らかい社会	31
5.5 生きていい理由を求める発達障害者たち	34
5.6 発達のマイノリティ——定型発達と非定型発達.....	36
6 結論.....	43
参考文献.....	46
謝辞.....	47